

ケ ー テ イ さ ん

松 山 昭 子



った。

この人はそのファースト・ネームをとって日本でケーティさん Katie-san と呼ばれていたという。私たちも当地でケーティさんと呼んでいるので、ここでもそう呼ばっていただこう。

ケーティさんは一八七七年八月(明治十年)アメリカ合衆国メーン州のバスという町に生まれた。現在八十七歳である。翌年に両親とともに日本に渡った。その頃の船は蒸気船で、船の両側に大きな車輪がついていたそうで、一カ月かかって太平洋を横断して横浜港に着いた。父親はジョン・ベリイという医師で、神戸の官立病院で医学を指導するために五年間を過ごし、ついで岡山の官立病院でさらに五年間を過ごした。その後、休暇でしばらく帰米した後、再び京都に赴き、同志社病院および日本における最初の看護婦学校を設立したという。ケーティさんは当時の同志社女学校で英語を学んだ。

一八九三年(明治二十六年)十六歳の時、高校と大学入学のためにアメリカに戻った。彼女の学んだバーンハム・スクール Burnham School は、現在、同志社女子大学の姉妹校

今から三年前に私たちはアメリカ合衆国マサチューセッツ州のウスターにやって来た。ウスターはボストンの西方五十キロの地点にある人口二十万の中都市であるが、マサチューセッツ州ではボストンにつぐ第二の都市で、大学の多い学園都市である。私の主人は東大医学部に在籍する医師で、内分泌学の研究のため当地にあるウスター実験生物学研究所で研究生活を送っている。当地には世界各地からの留学生が多いので、この地方の有志が多数集ってウスターにインターナショナル・センターというものを作り、アメリカ人と外国人との交流をはかってくれている。私

たちは当地に来て間もなく、この組織を通じてキャサリン・ベリイ Katherine F. Berry という老婦人を知った。交際しているうちに、この方は明治・大正の頃に日本に渡っていろいろ日本のために尽力し、特に同志社とは関係が深く、また帰国後に日本に関する著書も発行されたことがわかった。この方は生涯独身で通されたうえに、なにぶんにも相当の高齢で独り住まいのため、私たちもその孤独を慰めるつもりで何度もその家を訪れ、親しくしていただいていたが、この方の生涯に非常に打たれるところがあり、ぜひ日本の方にもこのアメリカ婦人のことを紹介したいと思

だそぞだ。その後、スミス・カレッジを卒業した。一九〇二年大学を卒業した後、健康を害した彼女は、日本に帰りたいという希望が実現できず、そのままアメリカに留まり、五年間両親とともに住みながら日曜学校の先生をした。一九一九年（大正八年）四十二歳の時、ケーティさんは同志社女子専門学校長から英文学の教べんをとることを依頼されて、かつて自分の学んだことのある学校に先生として戻って来た。しかし、彼女が日本に戻ってきたことを知った政府関係の父親の友人たちは、彼女を歓迎攻めにしたために暇がなく、



ケーティさんと松山さん

思うように教壇に立つことができなかったという。ケーティさんは日本と朝鮮の国鉄無賃パスをもらい、官中の観桜会、御菊会、天長節祝賀会や伊東巳代治伯爵の晩餐会にも招待されたりした。またその間、日本・朝鮮・中国の各地を旅行して廻った。

アメリカに帰国してからはいろいろな文化活動に関係、文筆生活にも入り、三冊の本を著わした。その中に父のことを書いた「古い日本を開拓した医師」A Pioneer Doctor in Japan と自分の少女時代の日本を書いた「ケーティさん」Katie-san という本がある。何しろ彼女の少女時代とは西南の役から日清戦争の時代で、日本人でもよほど高齢の人でないといけないような時代の話であるから、その頃の日本を知るには良い資料であろうと思われる。現在、当地で数多くの文化団体に関係し、アメリカ女流作家連盟ウスター支部長を始め、その役職名を十六ほども持つておられた。文化人として当地の名士の一人である。そして「八十年間世界一周」（八十年間ではないそうだ）という著書でアメリカ女流作家連盟賞を受けられたことを大変誇りにしておられる。

ウスターの落ち着いた住宅地に、現在、余生を静かに送っておられるが、部屋の中には日本にいた頃に手に入れたり、人からもらったりした日本の品々で、まるで博物館のようだ。

屏風、額、仏像、机、食器など中には年代が経ってかなり傷んでいるものもあるが、なかなか立派なものが多い。八十七歳の高齢にもかかわらず記憶力は非常に確かで、日本語もまだかなり覚えておられるようだ。昨年暮に健康を害されて一時入院されたが、間もなく無事退院された。その時贈った折紙の鶴に大変興味をもたれて、今度は折紙を教わりたいといわれる。親戚といえは弟一人妹二人の肉親もすでになくなられ、現在、甥と姪がそれぞれコネチカット州とカリフォルニア州に住んでおられるそうである。昨年末、同志社女子大学生の一人から「ケーティさん」を読んだといって手紙をもらわれたそうで、それをとっても喜んで繰返し言っておられた。私たちは間もなく当地を去って日本に帰ることになっているが、私たちの後にもケーティさんをいろいろみてくれる日本人の続いてくれることを願っている。

（日本女子大卒・アメリカ在住）